様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００６６５

研究課題名（和文）時間と相の副詞の意味論・語用論に関する日英対照研究

研究課題名（英文）A Contrastive Study of the Semantics and Pragmatics of Temporal and Aspectual Adverbs in Japanese and English

研究代表者
西山　淳子（NISHIYAMA, ATSUKO）

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０４６９１３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：日本語と英語の状態事象を修飾する時間・相の副詞の振る舞いを調査・分析した。現在の時の副詞nowと「いま」の直示用法に焦点を絞り、比較し、意味論・語用論分析を行った。英語の現在の時の副詞について、分節談話表示理論の枠組みを使った物語の談話における副詞の照応的用法の意味分析を修正し、直示的用法を分析した。そして、その分析を日本語に応用した。さらに、nowと日本語の「いま」の意味・解釈の違いについて観察し、その解釈の仕組みについては新グライス主義語用論から尺度推意を用いて分析した。そして、これらの副詞が時や条件の副詞節とともに現れる際の時制・相解釈への影響の違いを語用論的に分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
時の副詞（句）の意味論研究は未だ十分ではなく、特に直示的な用法と物語時間の中の照応的な用法、あるいは、現在時制以外と共起可能な用法など、さまざまな用法を持つ日本語と英語の現在の時の副詞については、諸用法を捉える統一的な意味分析や比較研究は行われておらず、その違いは明らかにされてこなかった。先行研究では、もっぱら直示的な用法と物語過去での用法を分けて記述・分析されてきたが、本研究では、ライヘンバッハ流の参照時間を利用した時間的定義を英語のnowと日本語の「いま」の意味とし、それぞれの諸用法（直示用法・物語過去の照応的用法・単純過去形文との共起）における言語間の違いを語用論的に説明した。

研究成果の概要（英文）：This study investigated and analyzed the meanings and interpretations of temporal and aspectual adverbs modifying stative events in Japanese and English. Focusing on the deictic uses of the present-time adverbs now and ima (‘now’), it compared them and conducted semantic and pragmatic analyses. First, using the Segmented Discourse Representation Theory framework, the deictic use of the present-time adverb now in English was analyzed by modifying its semantic analysis in narrative discourse. The analysis was then applied to the Japanese present-time adverb ima. Then, this study observed the differences in the meaning and interpretations of "now" between English and Japanese. It also analyzed the mechanism of the differences using scalar implicature in neo-Gricean pragmatics. When these adverbs appear in the conditional clauses, the differences in the effects on the interpretations of the tense and aspect were also analyzed from a pragmatic point of view.

研究分野：言語学、英語学

キーワード：時の副詞　時制　アスペクト　日本語　英語　直示　分節談話表示理論　尺度推意

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英語と日本語の相と時制の意味論・語用論研究では、完了形や過去形の解釈について、談話表示理論及び分節談話表示理論の枠組みで談話の構造との関係や語用論的推論過程や規則が明らかにされていた（Nishiyama 2006, Nishiyama and Koenig 2010）。

また、英語の相と時の副詞（句）については、代替意味論で分析され、副詞の位置と解釈の関係に関しても分析されてきた。そして、時の副詞と時制・相の解釈との関係が、さらに情報構造から分析され、談話標識としての用法を含む現在の時の副詞の意味と解釈の仕組みも明らかになっていた（西山 2017）。

しかし、時の副詞（句）の研究はまだまだ少なく、日本語の時間・相の副詞については、これらの枠組みでの意味分析はあまり行われておらず、まして、英語との対照研究も十分に行われていなかった。

２．研究の目的

英語と日本語の時間・相の副詞の意味・用法の比較対照研究を行い、時間的解釈と非時間的解釈、単文レベルの意味や談話レベルでの意味用法について、共通点とその違いを分析し、副詞の意味の時制・相解釈への影響も意味論・語用論の相互作用から明らかにする。

３．研究の方法

日本語と英語の状態事象を修飾する時間・相の副詞の振る舞いを調査・分析した。とりわけ、現在の時の副詞 now と「いま」の直示用法に焦点を絞り、比較・対照し、意味論・語用論分析を行った。まず、英語の現在の時の副詞について、分節談話表示理論の枠組みを使った Hunter (2012)や Altshuler（2016,2020）らの物語の談話における照応的な副詞の意味分析を応用・修正し、直示的用法を分析した。そして、その分析を日本語に応用した。さらに、now と日本語の「いま」の意味・解釈の違いについて観察し、その解釈の仕組みについては新グライス主義語用論から尺度推意を使い分析した。そして、これらの副詞が時や条件の副詞節とともに現れる際の時制・相解釈への影響の違いを語用論的に分析した。

４．研究成果

本課題研究では、英語と日本語の現在の時の副詞 now と「いま」は、それらが表す時間の解釈範囲に違いがあるが、それにも関わらず、統一的な意味論分析が可能であることを示した。そして、その違い、つまり、なぜ「いま」は近い過去の出来事とも共起し、now では不自然さが伴うのかについては、語用論的に分析できることを示した。

英語の現在の時を表す now は、直示用法では発話時間を表すため、物語の文脈以外では過去形と共起すると容認性が下がり、現在時制で状態事象のみと共起する。そのため、修飾する記述事象の状態性を示す指標の一つとして使われてきた。一方、日本語でそれに相当する副詞「いま」は、発話時間だけではなく、近い過去や近い未来の時間を含んだ幅のある時間を指すことができる。物語の文脈の外でも、過去形・非過去形と共起可能で、近い過去や近い未来の出来事を修飾し、状態性を示す指標とはならない。

まず、英語の now の直示的な用法について、過去時制の出来事文による参照時間（または基準時）(reference time)の更新（Partee 1984、Kamp and Reyle 1993)は、物語の文脈以外の過去時制文にも応用でき、現在の時の副詞が共起する文の状態性条件（Michaelis 1998, Altshuler 2016,2020）に基づく now の定義も、物語の文脈に限定したものだったが、それを修正することで、now の直示的用法と照応的用法のどちらも捉えられることが分かった。具体的には、Altshuler（2016）の now の意味要件を書き換え、状態と出来事の存在要件から、状態の存在のみ要件とし、出来事の存在は前提として定義し、状態の時間痕跡が参照時間と重なるものとした。これにより、物語過去に現れる now とそれ以外の過去形文に現れる直示的用法の now の両方を統一的に捉えられることを示した。

さらに、その英語の now の意味分析を、日本語の「いま」に応用し、「いま」の意味定義を行った。そして、直示的用法に加え、照応的用法やその他の用法について、対照比較を行なった。英語では、現在の時を表す副詞には、物語の過去の文脈の照応的用法や談話機能を持つ用法があり、直示用法の時間的な意味定義から意味論的または語用論的に説明できることが分かっている（西山 2017）。日本語の副詞「いま」にも、直示的用法、照応的用法、談話標識の用法が見られるが、英語の now と異なり、談話標識としての用法も限られる。

日本語の「いま」と英語の now の直示用法における振る舞いの違いに注目し、直示用法で、過去と非過去の二つの時制の文と共起する「いま」と、非過去とのみ容認される now を、共通の意味定義を基に分析した。つまり、両副詞に統一した意味分析を行い、言語間の違いによる時制と相のシステムの違いに伴って日本語と英語では異なる尺度推意が現れると考え、その尺度推意の違いを利用し、直示用法におけるこれらの副詞の用法の違いを語用論的に説明できることを示した。

つまり、英語の状態事象を表す過去形文に見られるような Q 推意（つまり、記述された事象は

現在まで継続しないという推意）が日本語では誘発されず、日本語の過去形「タ」の「発見のタ」の用法（例：「財布があった（いまもある）。」）に見られるように、過去の状態文の状態が現在まで継続しているというＩ推意が得られるため、過去形文と「いま」との共起が可能であることが分かった（例：「いま、財布があった。」）。

これらの分析は、当該の副詞が過去形と現在形と共起する用法に限定されるため、未来の事象と現在の時の副詞が共起する用法分析に取り組んだが、今後の課題となった。さらに、英語では反事実を表現するためには、特定の時制形や法助動詞が義務的であるのに対し、日本語では直示用法の時の副詞（「いま」など）を持つ条件節とともに、特定の時制や法助動詞なしに、明確に反事実の解釈が導かれる例が観察されている（例「いまお金があったら、私は新しいバッグを買っている。」（有田 2019）。この例の解釈は語用論的に導かれるものとされているが、その詳しい仕組みについては議論されていない。そこで、日本語では「テイル」の非完結性に由来する法性と条件付き完全性推論から反事実の解釈が生ずることを明らかにした。

このように、本研究では、過去と現在の時間解釈を持つ now と「いま」を中心にその意味論・語用論を研究してきたが、未分析の用法を今後の課題として残している。また、今後は、当初予定の日本語と英語の相副詞の比較対照研究も進めたいと考えている。

また、日本英語学会第 15 回国際春季フォーラムで、米国から Leonard Talmy 氏を招き、認知言語学の視点から直示性に関する特別講演を共催した。さらに、同学会の第４０回大会では日本語と英語の時制についてのシンポジウムを共催し、海外から講師を招き、議論・意見交換を行った。

引用文献

Altshuler, Daniel. 2016. *Events, States and Times.* Berlin: De Gruiter.

Altshuler, Daniel. 2020. Tense and Temporal Adverbs: “I Learned Last Week That There Would Now be an Earthquake” The Wiley Blackwell Companion to Semantics, 1-31.

有田節子（2019)「スル・シタ・シテイルの意味をめぐる 3 つの問い」『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 1』（編）庵功雄、田川拓海 東京：ひつじ書房．頁 25-52.

Hunter, Julie. 2012. Now: A discourse-based theory. In *Logic, Language and Meaning: 18th Amsterdam Colloquium, Amsterdam, The Netherlands, December 19-21, 2011, Revised Selected Papers* (pp. 371-380). Springer Berlin Heidelberg.

Kamp, H. & Reyle, U. (1993). *From Discourse to Logic.* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Michaelis, Laura A. 1998. *Aspectual grammar and past time reference*. New York: Routledge.

Nishiyama, Atsuko. 2006. *The Semantics and Pragmatics of the Perfect in English and Japanese.* State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.

Nishiyama, Atsuko & Koenig, Jean-Pierre. 2010. What is a perfect state? *Language*, 611-646.

西山淳子 2017「英語の現在の時の副詞nowの意味と様々な用法」『和歌山大学教育学部紀要-人文科学』 67号頁107-112.

Partee, Barbara. 1984. Nominal and temporal anaphora. *Linguistics and Philosophy 7*.243-289.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 西山 淳子	４．巻 73
２．論文標題 日本語と英語の現在の時の副詞の意味と用法	５．発行年 2023年
３．雑誌名 和歌山大学教育学部紀要．人文科学	６．最初と最後の頁 35～39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AN00257999.73.35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西山淳子	４．巻 683
２．論文標題 話し言葉における英語のnowと日本語の「いま」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 立命館文學	６．最初と最後の頁 141～150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西山 淳子	４．巻 74
２．論文標題 英語と日本語の非完結相と法性の解釈	５．発行年 2024年
３．雑誌名 和歌山大学教育学部紀要．人文科学	６．最初と最後の頁 1～7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AN00257999.74.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 Atsuko Nishiyama
２．発表標題 Granularity of Now in English and Japanese
３．学会等名 日本英語学会第40回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 The English Linguistic Society of Japan 15th International Spring Forum (Special Lecture)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tense: Comparison between Japanese and English（日本英語学会第40回大会シンポジウム）	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関